風疹抗体検査について

風疹は通常、小児に発症する軽症の突発性伝染病ですが、成人に感染が起これば重症化することがあります。妊娠中に感染すれば赤ちゃんに感染が及んで、赤ちゃんが先天性風疹症候群という先天異常を起こす危険性があります。風疹にかかったり、予防接種をうけることで、妊娠可能な年齢層の女性の 90%以上が抗体を持っています。しかしながら、この抗体を持っていない妊婦が妊娠初期(16 週まで)に風疹に感染を起こした場合、先天異常をおこすことがあります。抗体を持つ人は、再度風疹に感染することはまれで、また、再度、感染しても先天異常の原因になることは少ないといわれています。

先天性風疹症候群とは妊娠 16 週までの感染で発生することが多く、特に妊娠 8 週までの場合は 90%に起こるとされています。生まれた赤ちゃんの症状としては白内障、先天性心疾患（動脈管開存、肺動脈狭窄症など)、感音性難聴が主にあげられていますが、発育障害・精神運動発育遅延が見られることもあります。